

宗教誕生の地とその風土

児玉 寛嗣

かつて訪れたエジプトとインドを比較してみる。いずれも世界有数の宗教の誕生した地かそれに近い場所であり、その対照的な風土に興味を持ったからである。

カイロから東へ向かいスエズ運河を渡るとそこはシナイ半島。地平線が砂漠と空を隔し、草木がまったくない砂の海だ。生き物の痕跡すらない。

このような砂漠に住む部族はオアシスの周りにまばらに生えている草木を食む家畜を食糧にするしかなかった。家畜が草木を食い尽くすと別のオアシスを求めて移動する。砂漠をさまよう間、自然は人間に挑みかかる敵で、絶えず死と常に隣り合わせであった。ようやく辿りついたオアシスを他の部族から奪われることは全員の死を意味した。一致団結して戦い、オアシスを死守することが必要だった。部族を統率する首長は絶対的存在、それが高じて、首長が神的存在となったのではないか。人間が神になる人格神である。この系譜が砂漠地帯での宗教誕生のもとだと考える。まず、ユダヤ教が起き、キリスト教、イスラム教と続いた。いずれも厳しい戒律を持った一神教だ。

一方のインドでは雨季には熱帯の海から湿気を多く含んだモンスーンが吹き、多量の雨をもたらす。ガンジス河では土砂を含んだ茶色の水が滔々と流れている。大地は青々としており、どこにも豊かな水田の実りが見られる。

人々は豊かな自然の恵みのなかで暮らすことができた。時々起る大規模な洪水は上流からの土砂で大地を肥沃にした。しかし、雨不足など天候不順で凶作となり、飢饉が起ることも度々あった。自然には恩恵だけでなく畏怖も感じただろう。このような環境では自然を敵対視して、ある一人の人間を神格化する一神教は現れなかった。お釈迦さまは菩提樹の下で正座して悟りを開いたと言われるし、ヒンズー教徒はガンジス河で沐浴し、かつては遺骨も流していた。いずれも自然への回帰願望ではないのか。

誕生した土地の風土により宗教の特徴に大きな違いがあるようだ。